

平成26年度第1回秋田県社会教育委員の会議要旨

I 日 時 平成26年6月3日(火) 10時30分～12時30分

II 場 所 県庁第二庁舎4階 高機能会議室

III 出席者 委員：伊藤(州)委員 伊藤(晴)委員(議長) 大山委員 佐々木(公)委員
佐々木(信)委員(副議長) 佐藤(明)委員 佐藤(信)委員 島田委員
新屋敷委員 鈴木委員 新田委員 原委員

事務局：平川生涯学習課長 小玉副主幹(兼)社会教育班長 村井社会教育主事
片岡社会教育主事 柏木社会教育主事 森川社会教育主事
糸田社会教育主事

IV 会議概要

1 開 会

2 平川生涯学習課長あいさつ

○ 委員の紹介

3 議事

(1) 協議

① 骨子案について

- ・国際化は、県でいうグローバル人材の育成の他、今現在、学校に在籍している外国人が困難を抱えている現状をどう支えていくか考える必要があり、社会教育によるバックアップを考えるのが現実的である。外国出身の保護者が、言葉が通じにくく、配布物を読めず混乱している現状から、多面的に支えていく必要がある。柱立ては、全て家庭をベースにして考えていく必要があり、家庭教育をどう支えていくのかという視点で考えていくと、すっきりするのではないか。
- ・国際化と情報化を並べて、一緒にするとぼやけてしまう。情報化を学校生活と家庭生活にリンクさせることはできるが、国際化も一緒にするとかえって分かりにくくなる。そう考えると、視点は3つの方がはっきりするのでは。
- ・前回の会議で、情報化も国際化も、結局はコミュニケーション力という議長の発言が頭に残っていた。その考えでまとめられないだろうか。
- ・英語でのコミュニケーション能力を身につけて異文化に触れることも大切だが、それは学校で行うので、社会教育としては学校で行わない部分をどうするか考える必要がある。外国の方とコミュニケーションを図る際に、日本の文化や、自分の住んでいる秋田県の文化についてしっかり学んでいないと、他国に発信していくことはできないので、日本や秋田の伝統文化や自然に、しっかり触れ合う機会が必要である。
- ・沖縄県の先生が秋田県に来て、運動会で沖縄の踊りを取り入れるなどしている。日本の良い所や秋田の宝がいっぱいあるのに、私たちが把握できていない。地元の良いところを私たち

がしっかり発信できるためには、国際化という柱がある方が分かりやすい。

- ・情報化も国際化も切り離せるものではないが、まとめてしまうよりは一つずつしっかり見ていく方がいいと思うので、骨子案Aが良いのでは。
- ・今回のテーマとして、情報化・国際化を最初から出していることを考えると、それが柱となっている方が分かりやすいと思う。
- ・家庭教育支援ということが前提であり、単純な情報化・国際化ではない。どう家庭教育の中で取り組んでいくのか、どう支援していくかが大切である。情報化・国際化に入らない話題が家庭生活の部分と考えればまとめやすいので、骨子案Aが分かりやすいのではないか。
- ・3本柱で進めていくことになるが、あくまで家庭教育支援の視点から見た情報化・国際化ということを忘れないようにしたい。

② 各視点における課題・方向性について

③ 各視点における具体的な方策について

- ・様々な国の方が日本語教室に通って勉強し、行事にも参加しているが、自国以外の国を知る機会はなかなかない。それぞれの習慣や言葉の違いなど、一緒に学び、互いの文化を共有できる場がほしいと感じている。イベントはその時限りとなりがちなので、もっと深く、いろいろなことを知ることができる機会があるといい。
- ・学校からのお知らせ等のプリントは日本語で書かれている。外国人にとって、会話は何とかなっても、文章はなかなか理解できない傾向があるので、それを日本語教室のボランティアの方がそれぞれの国の言葉に直している。
- ・ある図書館には、小さな子どもに対して外国を紹介する本が見当たらなかった。低学年の子どもでも分かりやすい図鑑などがあれば、外国の文化を知るところから入っていける。言葉を勉強することも大切だが、文化を知ること大切である。
- ・大学のパンフレットには、グローバル化という言葉が必ず載っている。高校生までの段階で国際化への意識を高めておかないと、ついていけないのではないか。グローバル化という言葉が聞かれるようになったのはここ数年だが、教育の中で使われる機会が増えていると感じている。
- ・国際化はただ英語を話せばいいということではなく、身近にいる外国人とどれだけ交わるかが大事だと感じている。親同士が交流できれば、子ども同士もなじみやすい。それを受け入れるのが国際化ではないか。
- ・家庭教育支援での国際化は、親も子も、外国人を受け入れて交流していくということだと思う。
- ・自分で何ができるか考えた時に、読み聞かせボランティアがある。外国の話を読んでほしいと頼まれた時に、紹介できる場合もある。
- ・JICA、ALT、国際協力員など、多くの外国人がおり、様々な教室も行ってくれている。学校以外の社会教育の場でも、こういった方々の力を活用できればいいと思っている。

- ・外国人がスーパーで買い物中に困っていた時、店員と協力して手助けしたことがあった。それを見ていた子どもも、学ぶことがあったと感じている。
- ・外国人のストレートな意見としては、一発花火型のイベントはあるが、その後が続かない。「遊びにおいで」と言われるが、住所を教えてくれるわけでもない。自分ができることとして、気軽に家に呼んでお茶を飲むのもいいのではないかと思っている。ホームビジットというものだが、まだまだ浸透していない。こういう仕掛けが当たり前になるといい。
- ・日本では国語の教科書で有名な「スーホの白い馬」という話がある。この話が、モンゴルではあまり知られていない。モンゴルの方と話をした分かったことであり、生の情報は大事である。大上段に構えず、身近なところで仕掛けていくシステムがほしい。当たり前の生活を当たり前に見てもらおう、そういうおもてなしができればいいのではないか。
- ・学校のプリントがなかなか読めないという話があったが、自分もそれを感じる。町内会の回覧も読めないという場合もある。翻訳をボランティアでしてくれる人のコーディネートなど、社会教育の立場から考えられるのではないか。
- ・国際交流協会やNPOなど地域で活動しているボランティア団体の力をうまく活用したり、学校の空き教室を利用したりすることも考えられる。
- ・市町村合併で地域が沈滞している所もあるが、地元の国際感覚を持っている人や留学生をうまく活用していくことが考えられる。また、そうした人材バンクを作ることも効果的である。
- ・少年自然の家の主催事業に学生ボランティアが協力するとき、交通費などの経費は所で負担することになった。
- ・少年自然の家では、親子のキャンプ教室などが行われており、学生はボランティアの機会があれば、どんどん活動できるので、家庭教育支援につながっていく。県生涯学習課が学生のボランティア団体を取りまとめる枠組みなどを作ってくれば、学生が支援に関わりやすいと思う。そして、県内3か所の自然の家で組織が整っていて、県内で地域差が出ないようにコーディネートしてほしい。
- ・県内でも、ほとんどの学校に一人くらいは外国人がいる。子どもはこちらで生まれているので大丈夫だが、親は言葉が分からない場合も多く、連絡帳に書いても伝わらない。たまたま通訳できる人がいればよいが、そうでないところもある。
- ・家族の日常生活を支援していくにあたり、どれだけ地域の教育力をいかして外国人と関わり、生活できるようにしていく仕組み、体制ができているかである。保護者同士で交流し教え合あっていくことで、国際化が進んでいくのではないか、親や地域がどれだけ国際化を受け入れる基盤をつくっていかれるかである。
- ・県の社会教育施設でイングリッシュプロジェクトの事業があるそうだが、体験を交えたいいアイデアだと思う。学校でも外国人に来てもらう取組などが少しずつ進んでいるが、保護者が外国人を受け入れて交流していく、困ったときにサポートしていく体制が必要である。
- ・親同士で外国人を受け入れる体制づくりができていれば、ティータイム交流などが容易に進むだろうが、自然にできるわけではない。ある市では、家庭教育支援チームが学校や園に出向くことによって、そうした仕組みを支えている。

- ・構えて勉強するのではなく、身近なところから交流できるように、その国の料理を学ぶ教室などを企画して、参加しやすい環境をつくっている。
- ・公民館の外国語教室に実際に参加して初めて分かることもある。日中に開催していると参加できる人が限られるので、どう家庭に浸透させていくか考えることも必要である。秋田の山菜採りなど、公民館や放課後子ども教室とタイアップしてみるのも面白いかもしれない。
- ・家庭教育支援チームがあると動きやすい。また、人と人が近づくには、食が一つのきっかけになる。
- ・ボランティアの現場には若い方が少ない。放課後子ども教室や自然の家のイベントなどの際に、学生には交通費を出すなど、参加しやすい仕組みをつくることも大事である。若い人がいるとその場が輝いてくる。若者の力を生かして、地域を元気にすることも可能である。
- ・日本ではボランティアは無償という印象があるが、外国では最低限の交通費などは保証されている。
- ・ある市の仕組みをとおして中・高校生のボランティアを依頼したが、なかなかうまく機能していなかった。結局自分たちで学校を回って集めることになった。ボランティアに関心のある生徒も多いので、うまくつなげてくれるシステムがあればありがたい。
- ・県全体の施策として仕組みを作っていくことが求められている。先日、あるイベントに参加したところ、県立大学の学生や高校生が多く参加して活躍していたが、その場限りでもったいない気がした。大学生や高校生はやがて地域を担う人材であり、長い目で見て育成していく必要がある。ボランティアに手厚い支援ができるように、社会教育の立場から幅広くダイナミックに進めていけばいいのではないかな。
- ・ある保護者がボランティアで、毎週土曜日に学校の体育館を借りて子どもたちを遊ばせる活動をしていたことがあり、子どもたちにも好評であった。しかし、校長が代わったことで、学校の施設を借りられなくなってしまった。学校長の考え方ということかもしれないが、うまく機能しないだろうか。
- ・学校長がどれだけ地域行事や社会教育に高い意識をもっているかということだと思う。地域の行事は学区内のたくさん子どもたちや親が関わっており、特に支障がなければ地域の行事を受け入れることが当たり前と考えるし、それが地域に開かれた学校であると思う。
- ・実際のところ、地域や社会教育に関心の低い管理職もいるので、いっそのこと、県からトップダウンで方針を示していけば、現場では断る理由がない。個人的には、学校の管理職には必ず社会教育主事の講習を受けてほしいくらいだ。そういう流れができてくれればいいのだが。
- ・学校や地域によって良い悪いという違いが出るのではなく、県全体がそうなるといえるような流れがほしい。
- ・地域には、必ず見守り隊などの団体があり、連携・協力してやっている。共働きが多くなっている現状では、地域と連携しながらでないといけない。学校関係者だった人に民生委員をお願いしたり、地域の諸団体を巻き込んだりして、地域の教育力を高めたい。
- ・地域の中で、諸団体を巻き込んだ横の連携が大切になっている。

- ・昨年度実施したインターネットセーフティの地域サポーター養成講座を継続させたいと思っている。教育事務所の先生を講師に講座を実施したことにより、継続できる方向に進んだ。さらに、こうした講座を、各学校の研修会、あるいは幼稚園、保育所でもやってほしいと思い、情報をPRして広げたい。
- ・家庭生活については、市町村の生涯学習担当とも連携し、保護者向けの講座のほか、学校支援などでこまめに学校に入っていくことを進めたい。学校支援は管理職や先生方の考え方にも影響されるが、公民館とつながることにより、家庭科のミシンの授業など、とてもうまくいっている。子どもたちも親や先生だけでなく、地域の人に教わったり、叱られたりすることが良い経験になっているので、成功例を紹介しあうことで広げていきたい。
- ・PTAの研修などで人を探していることもあり、有効な人材バンクのシステムが機能していればいい。
- ・学校から地域に離れたスポ少では、指導者が忙しいことから長続きしない。また、経験者がやがて指導者になる循環型システムを目指したが、うまくいかなかった。若い人が地元に残ることで循環できれば良かったのだが、実際は就職の都合などもあって残れなかった。高校生までは確実に地元にいるので、彼らが積極的に行事などに参加できるようにしたい。
- ・以前、県の支援で親父の会がつくられた。今は、親子遠足など、親子での活動が昔ほど行われなくなってしまった。回数を限定することで、父親たちも休みをとりやすくなり、参加できるのではないか。親父の会の力はすごいものがあり、継続して頑張っている事例などあれば、ぜひ紹介していきたい。

(2) 今後の会議の運営について

- 4 その他 (諸連絡)
- 5 閉会 (平川生涯学習課長あいさつ)